

郷土の偉人を紹介するために、平成26年阿南市文化協会から「阿南市の先覚者たち第1・2集」が刊行されました。  
阿南市の発展に尽力された人たちの偉業を顕彰し、後世に語り継ぐために、27人の先覚者たちを奇数月に掲載して紹介します。

## 初の女性代議士・衆参初の女性委員長

紅露 みつ

明治26年（1893）5月10日、群馬県碓氷郡坂本村（現安中市松井田町坂本）で、父・上原佐五郎、母・しんの長女として生まれる。  
小学校4年のとき、遠足で高崎の観音山へ登り、頂上に立った、みつの目に大きく拓けた平野が飛び込んできた。「こんなに広い世界があるのか！こんな谷間のような山村で埋まったらいけない！」みつは若い血がたぎった。

やがて、東京に出て苦学しながら神田高等女学校（現神田女学園中学校・高等学校）を卒業、そして婦人記者となった。  
みつは、兄の友人である紅露昭と知り合う。彼が人力車夫などをしながら、日本大学法学科を卒

業して、弁護士をめざしていることを聞き、自分と同じ境遇にある昭と大恋愛の末に結婚した。昭和5年（1930）のことである。  
昭は弁護士として開業し、みつは主婦として家政に専念。長男震一を出産。

みつの大きな転機となったのは、夫・昭が国政に出馬したことである。同7年に、昭が徳島第一区から衆議院議員選挙に立候補するため、みつは初めて夫の実家である桑野へ来た。昭は、初当選以来同17年の選挙まで5回連続当選し、農林政務次官の要職も務めた。

長男震一は三高（現京都大学）法学科に在籍中に学徒動員で応召され、広島部隊に配属。原爆投下の犠牲となってしまった。みつは、辺り構わず泣き続けた。「戦争が震一を殺してしまった。私の息子を返して」と半狂乱となってみつは昼も夜も泣き続けた。

同21年4月の戦後初の総選挙に出馬予定で準備を進めていた昭であったが、農林政務次官であったため公職追放となり、出馬できなくなり、急きよ妻のみつが代わって立候補することになった。  
選挙公約の一つは「戦争のない世の中になるように」であり、そ

の二つ目は、「女性の地位向上」であった。この訴えが共感を得て、見事当選。徳島県初の女性代議士が誕生したのである。

徳島県は定数5人に対し、30人が立候補した。当選したのはいずれも無所属で、三木武夫、岡田勢一、紅露みつ、柏原義則、秋田大助の5人であった。

この選挙は、参政権を初めて女性が行使できる記念すべき選挙であり、全国から39人の女性代議士が誕生した。

みつは、衆議院議員1回、参議院議員4回、足かけ23年国会に議席を置いた。

同24年、みつは、在外同胞引揚問題特別委員を女性として初の委員長を務めた。これを皮切りに、社会労働委員として母子福祉法を制定し、母子福祉資金の貸付、母子相談員の設置、公益住宅入居の特別配慮など、母子福祉の総合的な事業の推進にまい進した。

みつは、市川房枝と政治的な立場は違っても気が合い、お互いに信頼し合って、何でも話し合える仲だった。同28年には売春防止法成立や酔っ払い防止法など、婦人議員団を中心に市川房枝と共に法案の成立に力を注いだ。

同30年の第二次鳩山一郎内閣では、女性初の厚生政務次官を務め、同37年に老人福祉法の成立に尽力、同39年には遺族問題議員懇談会委員、同和对策特別委員会委員も務めた。

同40年、特に婦人問題に対し、深い理解と情熱を持って女性の地位向上や健康、そして老人福祉など多年にわたり国政に貢献した功により勲二等宝冠章を授与された。

同43年に後進に道を譲り、政界を引退。引退後は、県内の婦人団体を結集して露光会を結成し、女性の地位向上のために、さまざまな講演会や研修会を開催するなど活躍し、また、原爆で苦しんでいる人々の援護活動に力を尽くし、原爆禁止運動にも同調した。

そして、昭和55年（1980）12月20日にこの世を去った。享年87。  
みつは、夫の地元阿南市にも、同26年に桑野川、蛭地川改修工事など農業の近代化にも力を尽くした。



みつ・昭おしどり夫婦の顕彰碑  
桑野町鳥居前

参考資料

「阿南市の先覚者たち 第2集」  
2014・阿南市文化協会

今回は「加藤松林人」を紹介します。